ボランティアに恋した 90 分

大学院生　金子恵妙（日本語教師、スクールソーシャルワーカー）

早瀬先生、笑いと学びの素晴らしいハーモニーをありがとうございました。ボランティアに対する誤解や思い込みが払拭され、「自分のやりたいこと」にフォーカスできる目を持てたように思います。

私は若い頃に警察官を、最近は会計年度職員として児童福祉に関わっていました。そのためか、「ちゃんとやり続けなければ」とか「何事も公平でなければ」という考えが体に染みついていましたし、正直に言うと「ボランティア」にはどこか「いい加減」というイメージがあって、それをマイナス面として捉えていました。でも、今回早瀬さんの話をお聴きし、その「いい加減」は自分が自発的に対象を選び、何なら心移りをしてもいいという「良い加減」なのだと気づきました。行政の仕事とボランティアを仕事か否か、有償か無償かだけで区別しようとモヤモヤが大量発生しますが、「そうかボランティアは愛なのか」という話でストンと理解ができ、「同窓会」の例え話でもう笑いが止まらないほど納得できました。

日本語教師として興味深かったのは、「何かすることはありませんか」には反応がないのに「どなたか、困っておられる方ご存じありませんか」という話には反応があるという話でした。話し手から見れば、ちょっとした言い回しの違いですが、受け取り手には大きな違いなのだと思いました。対等性を意識することで、支援を受ける側の壁を崩すことができる。これは地域に住む外国人に接するうえでも必要なことです。自分が外国の街に住んでいたらと相手の立場を想像することで、上から目線にならないように気をつけていきたいと思います。

そして、「障害が進めば進むほど貴族階級」と話された障害者の方の話と、それを嬉しそうに話された早瀬さんの表情も印象的でした。早瀬さんとその方とのそのやり取りも対等性の上にしか成り立たないものだと思います。心を開き合い、語り合い、笑い合える。もちろんご苦労もたくさんあるかと思いますが、そんな世界をつくり、その世界にいらっしゃる早瀬さんが羨ましいと思いましたし、私もいつか、そうした場で誰かと笑い合ってみたいと思いました。

最後に、早瀬さんご自身について。事前に資料や映像を拝見していたものの、リアル早瀬さんのキレキレの話術と巻き込み力にすっかりやられました。ボランティアの世界の酸いも甘いも知り尽くした早瀬さんの姿はまるで「愛の伝道師」。もっともっとお話をお聴きしたいので、しばらくは早瀬さんの「おっかけ」をしたいと思っております。引き続きよろしくお願いいたします。